烏石先生楷書『唐詩百字帖』

岩坪　充雄

一、はじめに

江戸時代を通して法帖出版の数を競うなら、細井広沢や沢田東江、巻菱湖が多いだろう。それに並ぶものとして今回の主人公である松下烏石もまた出版の多い江戸時代の代表的唐様書家の一人と考えることができる。

最近、松下烏石の楷書による和刻法帖『唐詩百字帖』の版木を得たのでその簡易な報告と版木を拓本に採った姿を撮影し紹介するものである。

手元には、大小八枚の版木があり、内容は松下烏石の大字に書かれた歐陽詢風の楷書法帖で、『唐詩百字帖』のものである。大字というのは一面（半丁）に二字の楷書を入れる法帖であることからそう判断したもの。版木は左版印刷用に作られている。つまり文字は鏡文字に彫られている。

筆者の松下烏石は初め佐々木文山の門人であったが[1]、後に細井広沢の門人となり、楷書は文山や広沢の書風と異なり、中国唐代を代表する欧陽詢が書くような楷書をよく書いている。

『唐詩百字帖』に書かれているのは「奉和幸韋嗣立山荘応制」という李嶠（り・きょう）の詩である。

南洛師臣契　東巖王佐居
幽情遺紱冕　宸眷屬樵漁
制下峒山蹕　恩回灞水輿
松門駐旌蓋　薜幄引簪裾

石磴平黄陸　煙樓半紫虚
雲霞仙路近　琴酒俗塵疏
喬木千齢外　懸泉百丈餘
崖深經錬藥　穴古舊藏書
樹宿摶風鳥　池潛縱壑魚
寧知天子貴　尚憶武侯廬

という詩である。

この漢詩は五言の二十句で成り立ち、文字数が百字なので「百字帖」と呼んだものだろう。

ちなみにこの和刻法帖の名称は封面（見返し）版木に従ったものである。

二、版木の状況

今回の烏石の法帖版木はすべてが揃っている訳ではなく、欠損がある。また経年の破損と虫損も見られる。本文の漢詩部分以外に書物を構成する封面版木、その裏面に跋文、烏石の落款部分の版木なども含まれている。

本文の漢詩百字部分は、二文字で半丁（一ページ分）となり、一丁あたり四字の文字配置を原則としている。

現存版木は整理の都合上［イロハ］を付した。以下版木伝存の現状を示せば次のようである。

［イ］（版木表）「南洛／師臣／契東／巖王」・（版木裏）「佐居／幽情／遺紱／冕宸」

前掲の「奉和幸韋嗣立山荘応制」一句から三句と四句目の最初の一字、合計十六字が該当する。版木の一面は二丁八字が彫られており、版木は表裏合わせて十六字の配置である。ハシバミは無い（以下の版木にもハシバミは無い）。

［ロ］（版木表）「樵漁」・（版木裏）「制下」

四文字が表裏に刻まれている小さな版木。版木の表面は詩の四句目、最後の二字と五句目の最初の二字であることが知れる。

［八］（版木表）「松門」・（版木裏）「陸煙」

これも前の版木と同じく表裏四文字の小さな版木。版木表の二字は七句目の最初の二字である。版木裏面の二字は「陸」は九句の最後の字、「煙」は十句目の最初の一字である。

［ニ］（版木表）「紫虚／雲霞／仙路／近琴」・（版木裏）「酒俗／塵疏／喬木／千齢」

十句目最後の二字から十二句最初の「琴」が表面。十二句二字目の「酒」に始まり、十三句の四字目「齢」まで。

［ホ］（版木表）「外懸／泉百／丈餘／崖深」・（版木裏）「經錬／藥穴／古舊／藏書」

十三句の最後の「外」字から、十五句の「深」までの八字が表面に配され、続く「經」から十六句の最後「書」までが裏面の八文字。

［ヘ］（版木表）「樹宿／摶風／鳥池／潛縱」・（版木裏）「壑魚／寧知／天子／貴尚」

十七句の最初から、十八句三字目「縱」が表面の八文字。続く「壑」字から、二十句の最初の「尚」字までが裏面。

［ト］（版木表）「憶武／侯廬」・（版木裏）「烏石署名と落款印」

残る詩は二十句最後の四文字「憶武侯廬」で、板の大きさも一丁分の見開きサイズである。裏面に松下烏石の署名部分が版にされており、落款印も彫られている。原稿となった元の書が「明和改元冬」とあることから明和元年の手であることも知れる。

［チ］（版木表）「烏石先生楷書／唐詩百字帖／繍雲館蔵版」・（版木裏）「跋文五行」

表面は封面版木である。この和刻法帖の名称が知れる。また蔵版元の名も「繍雲館」であることが知れる。これは松下烏石の室号では無い。おそらく跋文を書いた人物のものと思われる。

跋文は明和九年夏に釈了本によって書かれたものである。この書風は松下烏石のそれに似ており、了本という僧は烏石の書の門人であったものと察せられる。冒頭「斯帖也烏石先生倣歐陽氏之正楷…」とあり「烏石先生」と呼んでいる事もそれを示す。何よりこの元となった書は了本に松下烏石が書き与えたものである。先生より頂いた書を臨摸し上梓に及んだのは了本の出版事業であったろう。

以上［イ］～［チ］まで、伝存する八枚の版木状況は右に示した通りだが、欠落の文字も含めて本来はどのような版木として制作されたものか、版木一枚に四丁十六文字、片面二丁づけで表裏の形式を原則にして、詩に沿って「想定分割」すれば次のような［い］～［ち］の八枚分割の版木になるはずであったろう。

（　）数字は丁数。□囲み文字は版木の失われた部分を示す。

［い］（1）「南洛師臣」、（2）「契東巖王」・（3）「佐居幽情」、（4）「遺紱冕宸」

［ろ］（5）「眷屬樵漁」、（6）「制下峒山」・（7）「蹕恩回灝」、（8）「水輿　松門」

［は］（9）「駐旌蓋薛」、（10）「幄引簪裾」・（11）「石磴平黄」、（12）「陸　煙樓半」、

［に］（13）「紫虚雲霞」、（14）「仙路近琴」・（15）「酒俗塵疏」、（16）「喬木千齢」、

［ほ］（17）「外懸泉百」、（18）「丈餘崖深」・（19）「經錬藥穴」、（20）「古舊藏書」、

［へ］（21）「樹宿摶風」、（22）「鳥池潛縱」・（23）「壑魚寧知」、（24）「天子貴尚」、

［と］（25）「憶武侯廬」・（26）「烏石署名・落款」

［ち］「封面と跋文」

表裏に八文字を彫って四丁十六字が版木一枚という想定で配置したものである。

つまり本文百字の詩は二十五丁分になり、加えて烏石の落款分の一丁を加え、七枚の版木となる。加えて「封面・跋文」を表裏一枚とした版木が加わり、以上八枚を合せて一冊分としたはずである。

残念ながら題簽の版木は無い。本文の文字を□で囲んだ文字部分の版木も無い。もとよりあったかどうかは知れないのだが奥付にあたる版木も無い。本文の詩については二十四文字分の版木が欠落していることが判明する。

さて、その欠落状況であるが、いささか［いろは］の想定分割と合わない問題部分があるのだ。

［問題1］

伝存の［ロ］の版木では、「樵漁／制下」が表裏で一枚となって存在している。本来は同じ版面（［ろ］の表面）に存在する文字である。

［問題2］

さらなる問題は［ろ］の裏面最後の「松門」と［は］の裏面「陸煙」が表裏一枚で［ハ］として伝存している

点である。［八］の表面「松門」は［ろ］の裏面であるべきで［八］の「陸煙」は［は］の裏面に彫られるはずの文字である。つまり想定では、本来は別々の版木に彫られるはずの文字である。しかし実際はそうならなかったのである。

おそらく詩に沿って自然に文字の前後をとりながら配置すれば、［い］～［ち］の想定分割が成立するものと考えたが、伝存の版木［ロ、八］からは、想定通りに版木が作られなかったことが示されている。現代の本の制作から言えば面付け間違いということになる。単に彫り違いがあったということもあるだろう。

現実には版木が揃わないので、これ以上は想像でしかない。版木の文字面付けが違ったとしても、摺ったものを正しい詩の配列に直して製本すれば、仕上がった法帖に何ら問題は起こらない。ここでは版木製作上に多少の混乱があったらしい法帖であると考えられる点までだろう。「樵漁／制下」と「松門／陸煙」が表裏二文字ずつ切られた版木として伝存している原因は、正しい文字割り当てにならなかった彫り違いが影響したものかもしれない。

さらに制作上の混乱を想像させるのは、版木の下部に丁数字を刻むのだが、その部分に入木の痕跡を見るのである。

この『唐詩百字帖』について、完全ではないにしても版木がこのように伝存しているので、摺られて、製本され、和刻法帖の一つとして世に流通したものだろうと察せられる。現に版木には墨が塗られた痕跡があり、黒々としている。察するとはつまり、管見な筆者は実際にこの版木を使って摺られた法帖については未見であること。その他機関における収蔵も現状では確認できていないのである。

もしどなたか見かけたならば、あるいは手元に摺ったものがあるならば御教示いただきたく、お願いしたい。今回は、摺られたものを見ぬままに不揃いな版木からの想像で稿を為していることを予め御断りしておく。

三、版木拓本

では、松下烏石の楷書「唐詩百字帖」版木を拓本に採ったものを以下に示す。

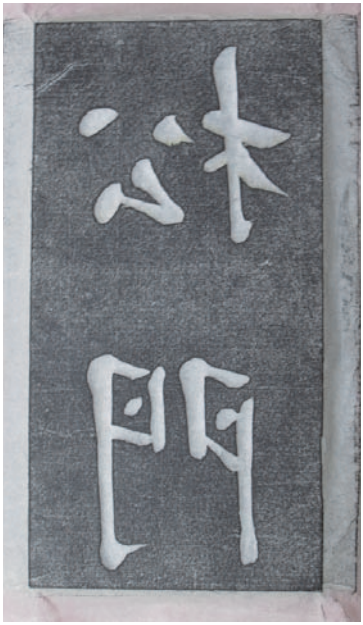
版木［イ］「南洛師臣契東巖王・佐居幽情遺紱冕宸」
本文「南洛／師臣」一丁オ・ウ（左下に「初」と彫られている）

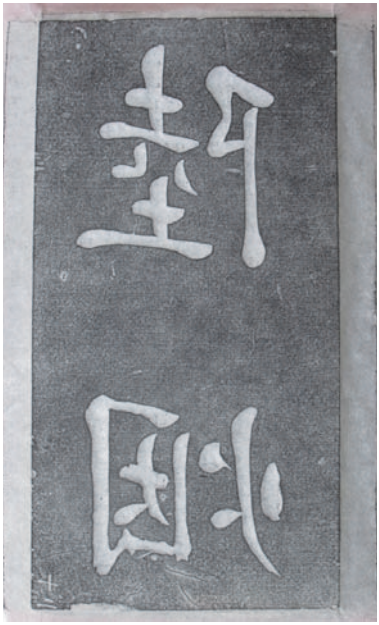
本文「契東／巖王」二丁オ・ウ

本文「左居／幽情」三丁オ・ウ

本文「遺紱／冕宸」四丁オ・ウ

版木［ロ］残欠「樵漁」表（五丁ウ）／「制下」裏（六丁オ）





版木［八］残欠「松門」表（八丁ウ）／「陸煙」裏（十二丁オ）

版木［二］「紫虚 雲霞仙路近 琴・酒俗塵疏 喬木千齡」本文「紫虚／雲霞」十三丁オ・ウ

本文「仙路／近琴」（十四丁オ・ウ）

本文「酒俗／塵疏」（十五丁オ・ウ）

本文「喬木／千齢」（十六丁オ・ウ）

版木［ホ］「外 懸泉百丈餘 崖深・經錬藥 穴古舊藏書」本文「外懸／泉百」（十七丁オ・ウ）

本文「丈餘／崖深」（十八丁オ・ウ）

本文「經錬／藥穴」（十九丁オ・ウ）

本文「古舊／藏書」（二十丁オ・ウ）

版木［へ］「樹宿摶風鳥　池潜縱・壑魚　寧知天子貴　尚」本文「樹宿／摶風」（二十一丁オ・ウ）

本文「鳥池／潜縱」（二十二丁オ・ウ）

本文「鰹魚／寧知」（二十三丁オ・ウ）

本文「天子／貴尚」（二十四丁オ・ウ）

版木［ト］（表）「憶武侯廬・烏石署名・落款」
本文「憶武／侯廬」（二十五丁オ・ウ）

「烏石署名・落款」（二十六丁オ・ウ）

封面版木［チ］「烏石先生楷書／唐詩百字帖／繍雲館蔵版」

跋文（封面版木の裏）

四、おわりに

版木で示したように、和刻法帖としては、封面（繍雲館蔵版）が表紙の裏に摺られ、貼り付けられていたことと思われ、本文の二十五丁に続いて、明和元年の烏石の落款が一丁続く、烏石が六十五歳の手であると知れる。さらに封面版木裏面を摺った明和九年の釈了本の跋文が最後に付けられていたはずの和刻法帖であろうことが想像できる。

刊行が行われたとすれば跋文の年号に従うべきであろう。跋文が明和壬辰とあるので、明和九年（安永元年）の上梓と察せられる。

跋文を書いた了本という真宗の僧は、おそらく明和年間には勢州蓮光寺の住職であった。これは同時に得た別の版木に明和庚寅年の年号付きで「勢洲洞津上部田光蓮寺請大蔵経募州序」という版木[2]があり、それは『唐詩百字帖』の識語撰文者と同じ了本の一文が刻まれているものなのである。ここに蓮華寺現住了本とあり、「釈了本印」「慧成」の印影つきで版におこされている。

了本が僧籍にあったこと、松下烏石の書の門人であったこと、この和刻法帖の上梓に関わりあったことまでは知れる。しかしそれ以上の情報は無い。

松下烏石は、安永八年京都にて八十歳で亡くなっているので、明和九年は烏石七十三歳、存命中の上梓であった。

近年の書物研究の一端として、版木にまで視野を広げた成果報告も目撃するようになってきた。しかし、触れば手が汚れ、既に役目を終えたものとして廃棄されたり、保存とはかけ離れた扱いの場合もある一方で、時に市場に版木が出る場合もある。版権の都合から版木が何人かの持ち合いになって、売られる際には完全な揃いではなく一部を欠いたものもある。あるいは単独でばら売りされるものも目撃する。二束三文の場合もあれば、無闇に高額の時もある。版木の価値や評価が定まる前に散逸あるいは廃棄される恐れがあるのが現状である。今後版木を扱った研究がどちらへ向かうのか、注目されるところである。

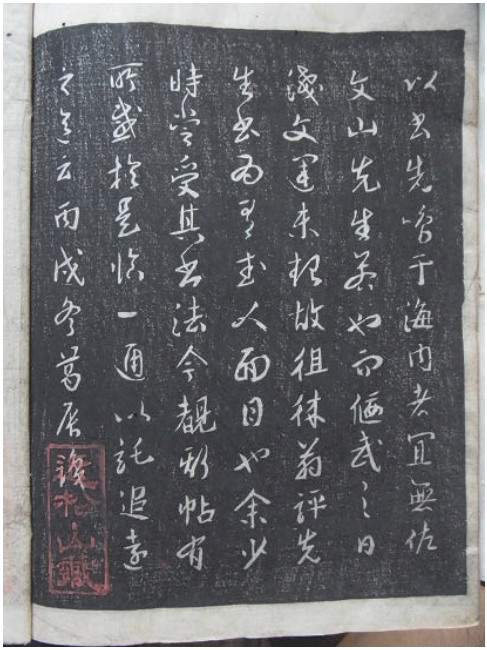
和刻法帖研究においては、印刷法が多様であることが、版木を見ることに拠っても明確にされる。今回の本文の

左版版木、加えて封面版木は凸字版（整版）に作り、文字が彫られるか残されるかの二種類の異なる印刷法の版木の様子が確認できた。どちらも版木に墨をつけて摺るために、使用後は墨で黒くなっている。和刻法帖のうち今回とは異なる正面版の版木の場合は墨がつかないため木肌の色がそのまま残っているなど、版木から法帖制作の違いなども見えてくる。和刻法帖での版木作成の技術についての研究もおそらくこれからの課題である。

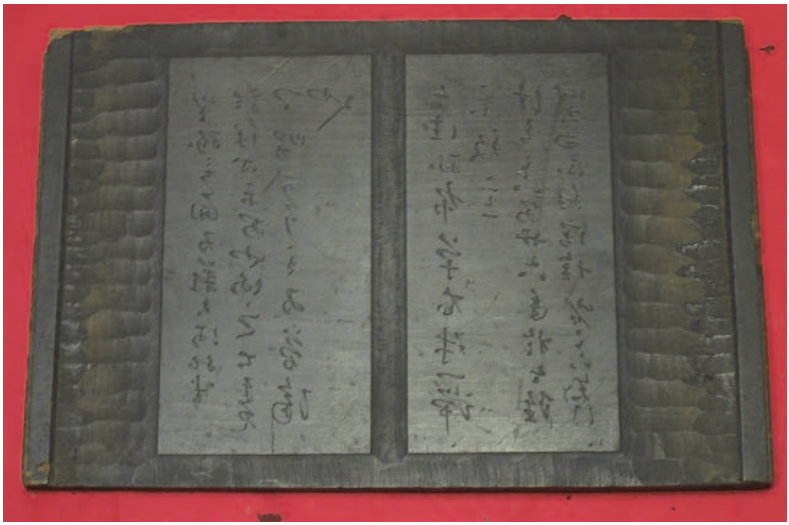
今回の左版の松下烏石大字書の版木の印象は、彫りの深さが新鮮に感じられた。比較の材料を持たないために、単なる個人的な思いではあるが、細かな字による左版『十七帖』の版木[3]とは随分趣が異なるものである。不完全な版木ではあるが一つの左版和刻法帖の版木事例を示し得たことは幸いとしたい。様々な視点で和刻法帖を研究するための一事例となれば幸いである。

【注】

(1) 烏石の左版法帖『乾坤帖』の末尾、松下烏石自身が書いた識語に自分が最初は佐々木文山に習ったことを述べている。図版識語四行目の下より「余少時嘗受其書法」と書かれている。左の識語部分の図版参照。



(2)「勢洲洞津上部田光蓮寺請大蔵経募州序」版木拓本



(3)十七帖版木（左版）